

脱聖化された社会における〈書く行為〉

—G・バタイユと〈現代〉社会—

« Écrire » dans une société profane: G. Bataille et la société « moderne »

神田 浩一

KANDA Koichi

日本語要旨

フランスの作家ジョルジュ・バタイユ (1897-1963) が好んで論じた〈過剰なエネルギー〉、〈供犠〉、〈エロティシズム〉、〈聖なるもの〉という現象は、すでに彼の同時代においてさえ依拠した古代社会と比べて著しく変容を遂げていた。バタイユ自身もこの変容という事実を前にして、その晩年に自身の思想を修正し深化させようと試みている。本稿では、晩年のバタイユ思想の修正と深化が〈書く行為〉という観点から考察される。

バタイユにとっては、〈書く行為〉とは、個体の閉域に倦み、この閉域を打ち破って自己を開き、他者と交流することを待望している人間存在にとって、自己の閉域を打ち破る貴重な契機であり、その描写によって読者にも〈自己喪失〉を引き起こす特種的な行為である。この〈書く行為〉のもつ社会的な意味は、かつては〈供犠〉という習俗が担った役割、つまり、過剰なエネルギーを蕩尽し、死の上演によって〈自己喪失〉を引き起こすという役割を、世俗化した現代社会において継承する〈文学〉を生み出すものである。

晩年のバタイユにとっては、カフカこそが〈聖なるもの〉が力を失い世俗化した〈現代〉社会における〈書く行為〉を体現した特種的な存在であった。カフカは、父親に象徴化されるすべてが〈有用性〉へ差し向けられる社会において、一見服従をするように見せながら、絶えず優柔不断さと気まぐれによって、〈有用性〉のみから成り立つ社会に揺さぶりをかけ、亀裂を生じさせる〈子ども〉の反抗としての書く。相次ぐ不条理な出来事によって高まる不安に苛まれ、最後には恥辱に満ちた死を迎える主人公の、いわば〈俗〉なる世界の物語は、創作の過程でも、読書の過程でも、ある地点で、〈聖性〉に転化して何ものにも従属することのない〈至高性〉を顕現させる。

欧文要旨

Pour Bataille, que signifie l'acte d'écrire dans une société profane ? Tel est le thème de cet article. Kafka est un écrivain privilégié dans une époque laïque où tous les soucis humains se concentrent sur l'utilité.

Selon Bataille, les déroulements typiques dans le monde kafkaïen (succession d'événements absurdes, angoisse accumulée et mort brusque et brutale) cessent d'être des événements uniquement absurdes au cours de leur écriture et de leur lecture, et permettent à la fois à l'écrivain et au lecteur d'éprouver un moment « souverain », moment précieux où l'être humain se détache du monde utilitaire et éprouve une sorte d'extase. Par l'acte d'écrire, Kafka résiste à ce monde utilitaire que représente son père.

1. バタイユ思想の限界と可能性

2つの世界大戦という人類にとって未曾有の出来事を挟み込む形でその生涯を終えたフランスの作家ジョルジュ・バタイユ（1897-1963）の思想は、後代の思想家たちに大きな影響力を行使したが、果たして 21 世紀の〈現代〉においてもその衝撃を保持し続けているだろうか。というのも、バタイユ思想の中で特権的に論じられてきたいくつかの主題は〈現代〉社会においては変容を余儀なくさせられているからだ。

例えば、バタイユはマルセル・モースなどの同時代の人類学の知見を自分なりに消化して、〈聖俗二元論〉を用いて社会を分析した。多くの人類社会は、欲望の即時的な充足を断念して生産に従事する〈俗〉なる時間と、過剰なエネルギーを一気に華々しく蕩尽する〈聖〉なる時間の交代から成り立っているというものである。しかしそもそも現代においては過剰なエネルギーは豪奢に蕩尽される代わりに、その都度、新たな生産に向けられる吝嗇さに取って代わり、その結果、ほとんどの人類社会では〈聖〉なる時間と〈俗〉なる時間の明瞭な転移は見られなくなっている。古代社会の分析に立脚したバタイユの〈聖俗二元論〉はそのままでは変容した〈現代〉社会の分析にどこまで有効であるかについては疑問を呈せざるを得ない⁽¹⁾。

またバタイユは、エロティシズムを「死に至るまでの生の称揚⁽²⁾」と定式化し、エロティシズムと死の間にある密接な共犯関係を強調した。だが性に関するさまざまな禁忌が緩和され有効性を失い、その結果、禁忌の存在によって逆説的に侵犯行為の価値が高められていたエロティシズムが陳腐なものとなり果てた〈現代〉においては、エロティシズムの体験もバタイユが述べるような死を感じさせるような深甚な体験というより、消費社会の数ある凡庸な商品の 1 つに成り下がっているように思われる。

さらに〈供犠〉という死の高みに人々を連れ出し〈聖なるもの〉を顕現させ、過剰なものを蕩尽する習俗は、その血生臭さにゆえに忌避されていった結果、〈聖なるもの〉は、恐怖と歓喜がないまぜになった強い情動的な価値を失い、存在しないも同然になっている。そして〈死〉自体も人々を〈自己喪失〉へと導く華々しい蕩尽から「ヒロシマ」の瞬時の死や「アウシュビッツ」の匿名の大量死として無機質なものと変わってしまった。

バタイユが生きた時代においてもすでに見られた社会のこの潮流に対して彼自身はどのように考えていたのだろうか。

晩年のバタイユにとって、彼の生きた時代が孕む枢要な問題の 1 つとして共産主義の問題がある。同時代の多くの思想家が、共産主義を土地や資本の共有、資本主義との対立というような問題系で論じていたのとは異なり、バタイユは共産主義をすべてが〈有用性〉に帰着する社会とみなして考察している。何ものにも従属しない〈至高性〉という概念を導きの糸として、古代社会から共産主義社会への変遷を論じていく中で、〈過剰なエネルギーの蕩尽〉、〈供犠〉、〈聖なるもの〉、〈エロティシズム〉

といった彼の特権的な問題群が時代とともに変容していくことに言及せざるを得なくなる。その思想的奮闘の様子は、『至高性』という名のもとに一冊の書物として編まれるはずであった草稿群の中に主として見ることができる⁽³⁾。

つまり、すでにバタイユ本人が、同時代における自身の特権的な主題の変容を強く意識し、その変容に対応した思索の試みに取り組んでいたのである。しかし『至高性』が未完に終わったことが象徴的に示唆しているように、思想の修正、深化は十分なる成果を見ることなく頓挫している。

この小論では、バタイユ本人が着手していた自身の思想の展開に着目して、〈現代〉社会におけるバタイユ思想の可能性について考察したい。

私たちが現在のところ立てている仮説は次のようなものである。バタイユ思想の〈現代〉社会における新たな可能性は、〈有用性〉がすべてを覆い尽くす社会に対して、全く〈有用性〉に帰属しない〈至高性〉という観点から根源的な異議提起を述べたことである（〈有用性〉という観点から見ると、ポスト冷戦の〈現代〉資本主義社会はバタイユが論じた共産主義社会がより強化されたものとみなすことができる）。そして、バタイユ思想の〈現代〉における可能性の具体的な現れは、1つは文学作品の中にバタイユ本人の意図を超えて表現されており、もう1つは〈芸術〉、その中でも〈書く行為〉に関する考察の中に特権的に見られる。ここでは以上の仮説に基づき、紙数の関係から、2つの可能性のうちの〈書く行為〉の問題にのみ焦点を当てて考察する。

2. バタイユにとって〈書く行為〉のもつ意味

まずはバタイユにとって〈書く行為〉がどのような意味をもっていたかを見ていこう⁽⁴⁾。そしてそれが同時代との対決でどのような変容を被っているのかを考察する。

バタイユは書くことを天命とみなしたが、長い間、書くことができなかった。そして書くことに生涯を通じて困難を覚えた。にもかかわらず、多くの場合は未完のまま終わる膨大な原稿を書き続けた。彼の実質上の最初の作品である『眼球譚』（1928）は、強迫観念に苛まれた青年バタイユが受けた精神分析から生み出されたものである⁽⁵⁾。この事例に見られるように、バタイユにとっては、書く行為とは、まずは自分自身のために、自己を分析する契機として存在していた。〈書く〉という動詞には自動詞と他動詞の両方があるが、バタイユにとって〈書く行為〉とは何よりもまず自動詞的なものであった。

しかし興味深いのは、自己に固有な強迫観念だと思われていたものが、自己分析としての〈書く行為〉を深化させていく過程で、逆説的ではあるが、他者にも通じる普遍的な価値を持つものだとバタイユが確信するに至ったことである。そしてバタイユは自分にとって揺るぎがたい真理を獲得する。それは、人間は個体の閉域に倦んでおり、この自己の閉域を打ち破って自己を開き、他者と交流することを待望しているというものである。こうしてバタイユにとって、〈書く行為〉は、自己の閉域を

打ち破り〈外〉へ出るという〈自己喪失〉の契機となり、同時にその描写になり、かつ読者にも〈自己喪失〉を引き起こす特権的な契機となる。

バタイユは、特異な戦略を用いて、自身の〈書く行為〉を〈自己喪失〉の〈交流〉という彼の目的に従わせようとする。彼は、〈自己喪失〉の言語における等価物は沈黙であると考え、言語に裂け目を入れ、言語によって沈黙を作り出そうとする。論証的な言説の中に、突然、叫びを入れたり、書きつつある文章についてのコメントを書き込んだりすることで、言説の線状性を絶えず破壊する。また、テキストの中で、審級の異なる〈私〉を供犠にふし、葬られる〈私〉に自己同一化し、読者にも自己同一化を促すことで〈自己喪失〉を共有しようとする。これらの二重の破壊（言説の線状性と〈私〉）によって、言説に情動性が導入され、理性のレベルだけではなく、情動のレベルにおいても読者と〈自己喪失〉の〈交流〉を実現させようとする⁽⁶⁾。

確かに、〈書く行為〉によって書くことの不可能性を示すこと、あるいは、言語を用いて言語の反対物である〈沈黙〉を表現することは、倒錯的な企てであり、最初から失敗を運命づけられている。しかしこれを単に否定的に捉えてはならない。バタイユの〈書く行為〉は、それが自動詞的なものであれ、他動詞的なものであれ、失敗を義務づけられた無意味な行為そのものである。しかしこの失敗こそが、成功や意味に一義的にとらわれた世界の硬直した一面性を、最も根源的なレベルで、「雄弁な沈黙として⁽⁷⁾」、逆説的に示していると考えられるからだ。

このバタイユの特異なエクリチュールは、第二次世界大戦中に書かれた『内的体験』（1942）や『有罪者』（1944）の中で特権的に結実している。しかしバタイユが〈書く行為〉に与えたこれら意味は原則として生涯を通じて変わらなかった。さらに、この〈書く行為〉の持つ意味については、〈現代〉社会においても有効であり続けると言える。なぜならバタイユによれば、人はいかなる社会に生きていても〈自己喪失〉および〈自己喪失〉の〈交流〉を求めているからだ。一方、〈書く行為〉がもつ社会的意義は、バタイユ自身の社会分析に関する考察の変容に合わせて変容している。

3. 〈書く行為〉の社会的意義の変容

先に見たように、バタイユにとって〈書く行為〉は、〈私〉の審級と言語の線状性の破壊、〈自己喪失〉の共有という意味を持っていた。この二点から考えると、〈書く行為〉はバタイユの問題系の中では、生涯を通じて考察の重要な導きの糸としてきた〈供犠〉の問題と密接な関係をもっている。したがって〈書く行為〉の社会的意義の変容を考えるにあたっては、何よりもまず〈供犠〉の社会的意義の変容を見ていく必要がある。

バタイユにとって、〈供犠〉とは、キリストの磔刑図、百刻みの刑に処せられた中国人青年の写真、アステカの供犠など何よりもまず自らを深く魅了してやまない個人的なファンタスムとしてあった。出発点は個人的なものであったが、〈聖なるもの〉に関するフランス社会学の探求などを参照してい

く中で、「あらゆる場所において、示し合わせることもなく、人間が一致して謎めいた行動をとるといこと、そして、生けるものを儀礼に従って殺したいという欲求、あるいはその義務を誰もが感じるといことが、いかにしてあり得るのか？⁽⁸⁾」というように人類社会に普遍的に見られる習俗であると認識する。そして最後には、〈供犠〉の謎を解き明かすことが、「この謎は人間存在の全体にとって鍵をなす⁽⁹⁾」とまで断言するようになる。

〈供犠〉の謎の解明は大きく2つのアプローチを取るが、その中の1つはエネルギー論的なものである。『社会批評』に掲載された初期の論考「消費の概念」(1933)の中ではバタイユは〈供犠〉を次のように位置づけている。

消費という観点から見ると、芸術の生産は、2つの大きなカテゴリーに分割されるはずであり、第1のカテゴリーは建築、音楽、ダンスからなる。このカテゴリーには現実的な消費が含まれる。しかし、彫刻や絵画は、建築自体——その場所を儀式や見せ物のために使う場合は言うまでもないが——の中に第2のカテゴリーの原理、象徴的な消費の原理を導入する。音楽やダンスもまた、容易に外部の意味を担うものになってしまうかもしれない。文学と演劇は、第2のカテゴリーを形成するが、その主たる形態においては、悲劇的な損失(失墜あるいは死)を象徴的に表現することによって苦悩や恐怖が引き起こされる。付随的な形態をとるときは、それは、いくつかの表現を通じて、笑いを引き起こすが、その構造はさきほどの場合と類似的であり、それはいくつかの魅惑の要素を排除する。ポエジーという用語は、損失状態の表現としては、墮落の度合いが最も少なく、知に偏重していない形態に適用されるが、消費の同義語として考察することができる。なるほど、それは、最も明確なやり方で、損失による創造を意味する。したがって、その意味とは、供犠のそれに近い。⁽¹⁰⁾

非生産的消費の一例としての芸術を論じた一節の中で、〈供犠〉は芸術と同じく非生産的消費の1つとみなされている。バタイユにとって、〈供犠〉はエネルギー論的な観点からはずっと変わらず蕩尽の問題として考えられていた。また供犠はここでは文学や演劇と結び付けられているが、のちのバタイユにとって供犠が廃れた後は、〈文学〉こそが〈供犠〉の特権的な継承者であると論じられるようになる。

だが文学は、宗教的作用を延長するにすぎない。文学とは宗教を本質的に継承するものであるからだ。文学は遺産として供犠を相続した。喪失することへの、自己を喪失することへの、また死を正面から見据えることへのあこがれは、まず供犠の中に満足を見出したが、それは今なお小説を読むことで得られる満足である。⁽¹¹⁾

引用の中には、〈供犠〉の謎に関わるもう1つの重要な側面が述べられている。それは〈自己喪失〉とその共有である。私たちは「同胞が死ぬのを見るとき、生者はもはや自己の外部にしか存在できない⁽¹²⁾」ので、死の上演である〈供犠〉は〈自己喪失〉の特権的な契機となる。⁽¹³⁾ 実際に死んでしまえば、その死を経験する主体は存在しないので、〈供犠〉は、人間が生きながら死の（疑似）経験をするために必要な制度である。言い換えれば、私たちは主客に分離することで自己意識を成立させており、つねにこの主客分離が解消される習慣を至高の陶醉として感じるような存在であり、そのために客体を破壊し、そこに同一化をすることで主体の擬似的な破壊、つまり擬似的な死を体感させる〈供犠〉をかつての人類社会は必要としたのだ。

しかし時代とともに〈供犠〉という儀礼は社会から消失していく。バタイユはそのことを次のように記述している。

供犠は歴史を持っており、そのヴァリエーションは、許容できる範囲で供犠を維持しようとした——結局それは難しかったのだが——痕跡を示している。ほかの人間を殺害することに対する恐怖は、時と共に大きくなっていった。カルカスがイピゲネイアの代わりに雌鹿の喉を、そしてアブラハムがイサクの代わりに雄羊の喉を裂いたということは、祭式者たちが、人間を燔祭に捧げる光景はついに耐え難いものになったという人間の意志を、自分たちの神に伝えなければならなくなったことを意味する。[中略]

もっと後になると、動物の殺害も、必要な量の苦悩をもたらす役割を、同じように止めてしまった。まさしく動物の殺害も受け容れがたいという感情が、それ以来、流血の供犠に終止符を打ちたいという願望とともに、形成され始めた。人間は、衝撃の度合いのより少ない宗教的態度を探し求めた。血が流れるのを見ても、ある者たちは、吐き気を催すだけになった。彼らの苦悩は、ある意味では、過剰に満ちたものであるよりも、欠如を露わにするものとなった。彼らは、神聖さを、人間性をいっそう弱くしてゆくかたちの下に思い浮かべるようになった。⁽¹⁴⁾

流血の〈供犠〉は人々から忌避されるものとなり時代とともに消失していく。〈供犠〉の消失と相応する形で〈聖なるもの〉も弱々しいものとなる。そして〈供犠〉は先の引用で見たように〈文学〉へとその立場を譲っていく。以上からバタイユにとっての〈書く行為〉のもつ社会的な意義とは、世俗化した現代社会においてエネルギーを蕩尽し、〈自己喪失〉を引き起こす〈供犠〉という習俗の継承者たる〈文学〉を生み出すことである。

4. 〈書く行為〉と異議提起 ——大人の世界に対する子どもの反抗——

校訂者タデ・クロソウスキーによってガリマール版全集の第8巻にまとめられたに『至高性』では、

第4章で〈至高性〉という観点から見た〈芸術〉の変遷が主に古代の〈聖〉なる芸術と現代の〈俗〉なる芸術を対比させる形で論じられている。続く第5章は第4章の議論を受けて共産主義の孕む原理的な問題を提起する数頁で終わっている。予定では最初バタイユが主宰した雑誌『クリティク』に掲載された論考「共産主義的批評の前のカフカ」が手を加えられて「カフカと共産主義」と題された第6章に来るはずであったが、結局、バタイユは統合を断念し、論考は『文学と悪』（1958）の中に移植された。

バタイユは、余暇にいたるまでのすべてを生産行為の充実へと投資する共産主義的思考と根源的に対抗する作家としてカフカを捉えている。⁽¹⁵⁾ したがってカフカにとって〈書く行為〉がいかなる個人的、社会的意味を持っているのかを考察することが、〈現代〉社会におけるかつての特権的な問題群の変容を前にしたバタイユ思想の変容とその可能性を理解するのに資するはずである。

そもそも個人の力を凌駕する官僚組織による不条理な出来事に押し流されて、最後は犬のような惨めな死を迎える主人公たちの暗鬱で悪夢のような物語を書いたカフカが一体なぜ共産主義に対抗する思想家なのか。それはまずカフカ自身が将来に備えて現在の欲望を断念し蓄積や投資を目指すのではなく、現在の欲望の充足を第一に考える人物であったからである。

カフカは、どの真正な作家たちもそうであるように、子供っぽくも、現在の欲望に従うというそれ [= 目的の優位性に従うこと] とは対立する優位性の下に生きていた。⁽¹⁶⁾

バタイユによれば、即時的な欲望の充足を最優先することは何ものにも従属しないという〈至高〉なあり方である。しかしすべてを〈有用性〉に帰着させようとする〈現代〉社会は、またすべてを意味づけようとして、意味づけられないものを切り捨てる社会でもある。そこにはかつては〈聖なるもの〉によって威信を保証されていた王もなければ、王の威信を顕示するのに活躍した〈聖なる芸術〉を担う芸術家も存在しない。さらには夜にだけ〈書く人〉になるカフカはすでに〈俗なる芸術〉を担う芸術家ですらない。カフカの生涯には、三度婚約し三度とも破棄するという以外には事件らしい事件はない。唯一、特筆するようなドラマがあるとすれば、それは父親との関係である。多くのカフカ論者が、父との関係をエディプス・コンプレックス的な解釈格好で読み解こうとするのに対して、バタイユは共産主義——革命という目的にすべてが従事し、すべてが生産手段の拡充に充填される社会、すなわちすべてが〈有用性〉に帰着する社会——との対決という独自の解釈を行う。

カフカは、彼の全作品に「父親の圏外への逃避の試み」という題をつけたいと思っていた。しかし、思い違いをしてはならないが、カフカは決して本当に逃避したいとは思っていなかった。彼の望んだこと、それは圏内で——排除された状態で——生きることだった。心の底で、彼は自分が追放されてしまっているということを承知していた。もっとも、ほかの人たちによって追

放されたのか、それとも彼が進んで自分を追放したのかは、分からない。ただ彼は単純に、利害に関わり、産業化され、商業化した活動の世界で、耐え難い人間となるように振る舞った。彼は夢想の持つ小児性の中にとどまることを欲した。⁽¹⁷⁾

先にも見たように、バタイユにとってカフカの父とは未来の目的のために現在の欲望の充足を断念する社会を象徴した存在であり、一方、カフカは現在の欲望に従う〈子ども〉の立場を代表している。しかしカフカの振る舞いで一番重要なことは、その反抗方法である。カフカが父に取って代わろうとはせず、父の支配圏内にいながらも排除された状態に留まろうと欲していることである。カフカの反抗にはバタイユがかつて礼賛したような豪華な蕩尽も、死の高みにまで登りつめ自己を神と同一視するような荒ぶる〈自己喪失〉の体験も、死を垣間見させるようなエロティシズムの深甚なる体験も、ましてや威勢のいい反逆者すらいない。たた〈大人〉の世界内で排除された「耐え難い人間」がいるだけである。この何とも「冴えない」人間の「冴えない」〈子ども〉の反抗こそが、晩年のバタイユ思想の到達点なのである。

カフカの絶望的だが秘められた力とは、まさに、自分に生きる可能性を認めてくれない権威にたてつこうなどとは少しも思わないこと、権威に対立してこれと張り合おうとするありがちな誤謬から遠ざかっていたことにある。それというのも、束縛を拒否した者も、もし最後に勝利者となるならば、その時には今度は彼自身が、自分にとっても他人にとっても、今まで自分が戦ってきた当の相手と同じものになり、束縛の手綱をにぎる者となるからである。小児的な生、すなわちまるで計算のない至高の気まぐれとは、勝利のあとまで生き残ることができるようなものではない。⁽¹⁸⁾

バタイユは大人の世界に張り合うこと、言い換えれば、すべてが〈有用性〉に帰着する社会に張り合うことを「ありがちな誤謬」と一蹴している。そして一見卑小で受け入れがたいカフカの「服従」を高く評価している。承認を求めるために死を賭した闘争になだれ込むヘーゲルの〈主人〉と〈奴隷〉の弁証法を考え抜いたバタイユ、何ものに従属しない「内的体験」の権威について考え抜いたバタイユは、権力の問題にきわめて敏感であった。既成の権力を奪取する身振りは、結局、新たな権力者を創造するだけで権力構図の図式は固定したままで何も変わらない。したがって、バタイユは権力の転倒である革命ではなく反抗を唱えている。それも権力が固定しないための永続的な反抗である。

カフカは、最後の息を引き取るまで、譲歩なしに、この絶望的な闘いを継続した。彼は決して希望を持たなかった。なぜなら、唯一の出口としては、死を通して、固有性（気まぐれ、子供っぽさ）を完全に放棄して、父親の世界に入ることしかなかったからである。⁽¹⁹⁾

カフカにとって〈書く行為〉とは、〈有用性〉があらゆる領域に行き渡った世界で、一見、権力に服従するように見せかけ、子供らしさを装って、その実、あらゆる機会を逃さずに、傍からには優柔不断と見える不同意で、〈有用性〉の世界のいたるところ不協和をもたらす絶望的な営みである。それは同時に作者の分身である『城』のK、『審判』のジョゼフ・Kの振る舞いでもある。

『城』のK、『審判』のジョゼフ・Kほどに子供らしく、また黙々として突飛な人間がいるだろうか。この「ふたつの作品にあらわれるまったく同一な人物」である作者の分身は、おとなしいながらも押しが強く、計算もなく動機もなく闘争を続け、しかも、常軌を逸した気まぐれと盲目的な頑迷さとのために、何もかもだめにしてしまう人間なのである。⁽²⁰⁾

子どものように無計画に振る舞い「何もかもだめにしてしまう」カフカの物語の主人公たちは、物語の中では不条理な出来事の連鎖に右往左往し苦境に追い詰められていき、次第に自分の依拠する価値観に信頼が持たなくなり、高まる不安のただなかで、何か未知なるものを漠然と予感する。この未知なるものは、物語内では宗教的な啓示にも哲学的な認識にも帰結することなく、主人公たちは宙吊りの不安の中で無残な死に直面する。バタイユによれば、それは何よりもまず小説の魅力をなす。

実際、一篇の小説の魅力は、主人公の不幸に、彼にのしかかる脅威に結びついている。困難や不安が伴わなければ、彼の生はわれわれを惹きつけ何ものをも、われわれを夢中にさせる彼とともに生きるように強いる何ものをも持たないであろう。⁽²¹⁾

主人公たちの死は、小説の魅力をなすだけではない。バタイユは、そこに登場人物、読者、そして作者の不安が恍惚に転化する契機を見ている。言語による死のシミュラークルを前にして恐怖と歓喜がないまぜになった情動的な体験をすること、それはかつて供犠が担ったものであり、現在、文学が引き受けているものであるのは前に見た。

この体験を書き手のカフカ側から見てみよう。バタイユは、一人の青年が父親と口論したあげく自殺を遂げるというカフカの短編『死刑宣告』の結末を引用し、さらにはその執筆中、主人公が自殺する結末を書く時に射精のことを考えたというマックス・ブロートへ宛てた文章の一節（「きみは、この最後の文章が何を意味するか知っているかい。僕はこれを書きながら、猛烈な射精のことを考えたんだよ。」）を引用し、カフカにとっての〈書く行為〉の意味を考察している。バタイユの論考の出発点となったミシェル・カルージュのカフカ論では、カフカにとって書くという行為は父親に対する敗北感を心理的に補償するものだと解釈されていたのに対してバタイユは異議を唱える。

それは [=短編の結末] 喜びの至高性を、つまり、存在が至高なやり方で無へと横滑りすること——この無とは、他者たちが存在に対してそうであるような無である——を表していることが分かる。

バタイユの説明は難解で非常に分かりにくい、概ね次のようなことを述べている。バタイユは〈主体〉を実体的でそれ自身で閉じて完結したものとは考えておらず、比喩的には大いなる流れの中の一つの渦のようなものだと考えている。通常の認識では、その渦は他の渦とは明瞭に区別されており、そのために〈他者〉は〈自己〉の外にあると感じられている。この認識が、〈書く行為〉によって〈死〉の表象を作り出していくさなかに、〈自己〉と〈他者〉の区別のたがが外れ、書いている〈私〉は非人称の存在となり、〈自己〉と〈他者〉との交流である〈エロティシズム〉を発現し、そこでは通常では未知なるものであり、〈無〉としか表象できない〈死〉が情動的な認識の中で充溢を生じさせる。このようにして〈書く行為〉のただ中にも〈至高性〉は顕現する。

カフカの作品に見られる、不条理な出来事の連鎖から不安が高められ、最終的には死に直面するという状況は、実存主義的な文脈とは別な次元で、俗なる世界を生きる人間の条件そのものであり、連続と続く俗なる世界の描写は、書き手にとっても、またそれを読み手にとってもその総体として〈至高〉な瞬間を顕現させる。それは古代社会が持った祝祭としての〈供儀〉を失った現代社会においては、〈至高性〉を体感させる貴重な契機である。

ただ、文学だけがなお、私たちが内に孕んでいる必然的に至高のものへと、私たちに導くのである。ただ文学だけがそうすることが出来る。それは、今後、私たちは、もはや現実に至高のものであることはできないということを意味している。[中略]ところで、文学は死ではないが、ただ、それを目指して誠実さを情熱に求めるものが。私たちが到達不可能なものに……もはや私たちが隷属状態にない瞬間に近づけるものなのである。⁽²²⁾

文学だけが到達可能な〈至高性〉が脱聖化した〈現代〉社会において〈至高性〉に到達する特権的な契機であり、気まぐれな〈子ども〉として〈父〉に反抗するカフカの〈書く行為〉が〈現代〉社会における文学の〈至高性〉の可能性を示している。そして徹底的に世俗化した〈現代〉社会におけるバタイユ思想の可能性とは、既成道徳を髣髴ものにしたサドの憤怒にでもなく、キリスト教道徳を威勢よく徹底的に批判したニーチェにでもなく、一見冴えない〈子ども〉の反抗であるカフカのこの〈書く行為〉に社会批判の可能性を見出したところにある。

注

- (1) 例えばサルトルは『文学とは何か』でバタイユの蕩尽の理論は過去に存在した祝祭への郷愁に過ぎないと批判している。(Jean-Paul Sartre, « Qu'est-ce que la littérature ? », *Situations II*, Paris, Éditions Gallimard, 1948, p. 225.)
- (2) Georges Bataille, *L'Érotisme, O.C., t. X*, Paris, Éditions Gallimard, 1987, p. 17.
- (3) 戦後のバタイユは、彼の思想的テーマであった〈過剰なエネルギーの蕩尽〉、〈聖なるもの〉、〈エロティシズム〉、〈芸術〉の〈歴史的〉な変遷を記述しようと試み、それぞれのテーマが『呪われた部分』(1948)、『宗教の理論』(未完、執筆は1948年頃)、『エロスの涙』(1961)、『ラスコー』(1955)と『マネ』(1955)という著作として結実している。(しかしこれらの書物は通常の意味での歴史書ではなく、たとえ歴史的事実を参照することはあっても、あくまでも思弁的なモデルとしての変遷の考察である。それはアレクサンドル・コジュエヴによって解釈されたヘーゲルの『精神現象学』の「主人と奴隷の弁証法」を敷衍した歴史観にもとづいている)。この〈歴史的〉変遷の記述の試みがバタイユに自身の思想のもつ有効性の同時代的な限界と可能性を考えることを促したとも言える。
- (4) バタイユにとって書く行為の持った意味についてはすでに多くの論考があるがその紹介も含めて拙論を参考のこと(「書くことの不可能性という可能性—バタイユにおける自己喪失と書く行為—」『仏語仏文学研究』第34号、東京大学仏語仏文学研究会、2007年、P.123-144.)
- (5) 「私があなたに語った最初の本は、私が精神分析を受け、そこから抜け出すことによつてのみ可能になったのです。私は、ただそのようにして解放されることによつてのみ自分は書くことができたと言うことができますと思います。」(Madeleine Chapsal, *Quinze Écrivains Entretiens*, Paris, Juliard, 1963, pp. 14-15.)
- (6) 「私の文章を読んでくれる君、君が誰であろうともかまわない。君の好運を賭けたまえ。私がしているように慌てずに賭けるのだ。今これを書いている瞬間に私がしているように。私は君に賭ける。」(Bataille, *Sur Nietzsche, O.C., t. V*, Paris, Gallimard, 1973, p. 110.)
- (7) 「バタイユは、書きながら何も求めない。賛美も懲罰も要求しない。特異で危険なパロールの中に、彼は不可能なものを開く。その不可能なものは、読者の側では、バタイユと同じような放棄、同じくらいに偉大な供犠、同じくらいに雄弁な沈黙を要請する。」(Bernard Sichère, « L'écriture souveraine de Georges Bataille », *Tel quel n° 93*, automne 1982, p.75.)
- (8) Bataille, *La limite de l'utile, O.C., t. VII*, Paris, Éditions Gallimard, 1976, p. 264.
- (9) Bataille, *op. cit.*, p. 264.
- (10) Bataille, « *La notion de dépense* », *O.C., t.I*, Paris, Éditions Gallimard, 1970, p. 307.
- (11) Bataille, *L'Histoire de l'érotisme, O.C., t. VIII*, Paris, Éditions Gallimard, 1976, p. 92.
- (12) Bataille, *La limite de l'utile, op. cit.*, p. 245.
- (13) 「供犠とは、失いたいという激しい欲求から結果するものだ。」(Bataille, *op. cit.*, p. 257.)
- (14) Bataille, *La limite de l'utile, op. cit.*, p.280.
- (15) バタイユがカフカを論じた状況は次のようであった。父との葛藤から精神的に論じる立場を除けば、一方でカフカを蛇蝎のごとく忌み嫌う共産主義者がいて、他方では、カフカをマルクス主義の観点から救済しようという動きが見られた。文学の〈至高性〉を唱えていたバタイユにとって、文学作品をある種のイデオロギーに照らし合わせて論じることは耐え難いことであり、バタイユのカフカ論では文学の無目的性、無意味性が強調された。

- (16) Bataille, *La littérature et le mal*, *O.C.*, t. IX, Paris, Éditions Gallimard, 1979, p. 275.
- (17) Bataille, *op. cit.*, p. 275.
- (18) Bataille, *op. cit.*, p. 275.
- (19) Bataille, *op. cit.*, p. 278.
- (20) Bataille, *op. cit.*, p. 279.
- (21) Bataille, *L'Histoire de l'érotisme*, *O.C.*, t. VIII, Paris, Éditions Gallimard, 1976, p. 96.
- (22) Bataille, « Hemingway à la lumière de Hegel », *O.C.*, t. XII, Paris, Éditions Gallimard, 1988, p. 258.